

南米ベネズエラの“水事情”

上下水道普及率の高いものの…家庭への接続未整備



グローバルウォーター・ジャパン代表 国連環境アドバイザー 吉村 和就

1972年荏原インフィルコ入社。荏原製作所本社経営企画部長、国連ニューヨーク本部の環境審議官などを経て、2005年グローバルウォーター・ジャパン設立。現在、国連テクニカルアドバイザー、水の安全保障戦略機構・技術普及委員長、経済産業省「水ビジネス国際展開研究会」委員、千葉工業大学非常勤講師などを務める。著書に『水ビジネス 110兆円水市場の攻防』（角川書店）、『日本人が知らない巨大市場 水ビジネスに挑む』（技術評論社）、『水に流せない水の話』（角川文庫）など。

ベネズエラ・ボリバル共和国（通称・ベネズエラ）は南米北部に位置し、東はガイアナ、西はコロンビア、南はブラジルと国境を接し、北はカリブ海に面している。国名の由来には諸説があり、①イタリア出身の探検家・地理学者であるアメリゴ・ヴェスプッチが、マラカイボ湖に浮かぶ水上家屋で暮らす原住民を見て、ベネズエラ（小さなベニス、Venezuela）と名付けた②原住民の呼び名「大なる水の民」に由来する—などの説がある。いずれにしても、水資源に恵まれ、水と深い関わりがある国ということだ。そんなベネズエラの“水事情”を紹介する。

ベネズエラの地図



ンドなどを豊富に産出している。

そのベネズエラの人口は2990万人（2012年、世界銀行調べ）。国土面積は約91万km²（日本の2.4倍）で、このうち16%以上が多雨地域に属し、自然の宝庫として知られる。同国南東部のカナイマ国立公園にある

「天使の滝」（写真）は、世界一の落差（979m）を誇る素晴らしい滝だ。

同公園を含むギアナ高地は年間降水量が3000mmに達し、雨期（4～

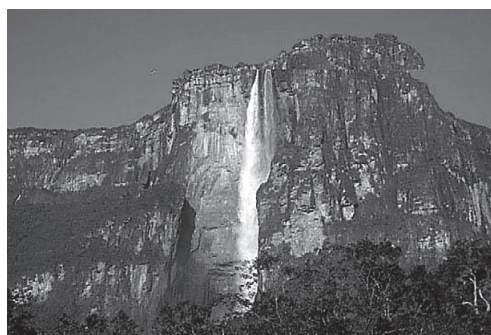


写真 世界最大の落差を誇る「天使の滝」
＝ベネズエラ・カナイマ国立公園

10月）にはほぼ毎日、スコールが数時間続く。水資源の大半は、南部のボリバル州とアマゾナス州に賦存し、両州で地表水の85%を占める。

資源大国の水資源は南部に集中

ベネズエラは資源大国である。世界最大の石油確認埋蔵量を誇り、原油生産量ではメキシコに次ぎ中南米で第2位となっている。外貨収入の95%は石油の輸出によるもので、同国経済は石油収入に大きく依存している。天然ガスの確認埋蔵量は5.6兆m³で世界第8位。このほか、鉄鉱石、ボーキサイト、金、ダイヤモンド

表 ベネズエラの上下水道普及率 (2005年)

項 目	上水道普及率	下水道普及率
都市部 (国民の93%が居住)	94% 家への接続89%	広義※ 94% 下水道73%
農村部 (国民の7%が居住)	75% 家への接続49%	広義※ 57% 下水道12%
全国平均	93%	91%

※「広義」とは下水道本管の敷設状況を示す
出所：WHO/ユニセフ JMP (共同監視プログラム)、ベネズエラ JMP

人口は北部の沿岸地域に集中しており、その水需要を満たすため、水資源の豊かな南部から北部へ水を輸送する大規模インフラ施設が建設された。水道の8割以上は国営水道公社が運営している。

上下水道の普及状況

ベネズエラの上下水道普及率は中南米の中でも比較的高く、都市部での水道普及率は94%、全国平均は93%である(表)。ただし、水道、下水道とも家庭への接続は低く、衛生的な環境にあるとは言えない状況にある。

水道料金は41米セント(約50円)/m³と政策的に低く設定されている一方、無収水率(盗水や漏水で料金が徴収できていない水の割合)が約40%と高く、料金の回収ができていない。これに対応するため水道料金を上げたが、今度は盗水率が上昇している。

ちなみに水道メーターの設置率は約36%。下水の汚水処理率は約36%で、残りは無処理のまま河川などに放流されている。

水と衛生改善に諸外国が支援

ベネズエラでは、環境省と天然資源省が水と衛生の政策を推進している。上下水道サービスは、全人口の8割をカバーする国営水道会社

(HIDROVEN)、5つの州水道会社、国営企業CVG、いくつかの自治体によって提供されている。

水と衛生改善のため、米州開発銀行やカナダ開発庁、アンデス開発公社は資金と技術を援助。米州開発銀行は約1億ドル(約120億円)、アンデス開発公社は約2.9億ドルを融資している。

日本は、無償資金協力で13.24億円(2012年度まで)、技術協力実績で104億円を援助している(国際協力機構ベース)。なお、同国への援助実績の順位は①米国②スペイン③ドイツ④フランス⑤日本の順である。

内政問題と危機的な経済情勢

資源が豊かな国であるが、低所得者層が多く、犯罪件数も世界最高レベル(2013年の総犯罪発生件数25.7万件、殺人事件1万3600件、強盗事件6.4万件)にある。

背景には“政治の貧困”があると言われている。1958年以降、2大政党による民主的な政治体制が継続してきたが、2大政党の幹部による政治・司法の私物化、汚職の蔓延、貧困層への無策が深刻な治安状況や高いインフレを招いてきた。

1999年、低所得者層の高い支持を受けチャベス大統領が就任。反政府勢力や既得権者の激しい抵抗を受

け、苦しい政策を続けてきたが、2006年の大統領選では国民の圧倒的な支持を得て再選された。その後、2013年3月に同大統領の逝去が発表され、現在のマドゥロ政権が発足したが、さらに混迷を深めている。

ベネズエラの石油輸出の約45%は米国向け。その米国はシェール革命により国内の石油生産量が増え、石油を輸入する必要がなくなるうえ、折からの原油価格暴落も直撃し、ベネズエラはさらに危機的な経済情勢に直面している。

厳しい庶民の暮らしぶり

石油があるのに、停電が頻発し日用品が手に入らない。首都カラカスでは、すでにトイレトペーパー、洗剤が消え、水道は断水が続く、水不足に直面している。飲料水であるボトルウォーターも品薄となっており、入手するためにスーパーに長い行列ができ、配送トラックが到着すると、われ先に走り出す姿がTVなどで放映されている。最近では1人ボトル何本と販売制限も行われており、多くの国民は不足する日用品を手に入れるため奔走している。原因は政治の無策と言われている。

石油による外貨収入が激減して経済活動が停滞し、外資不足で海外から日用品を輸入できない状態が続くベネズエラ。石油や水をはじめ豊富な天然資源に恵まれているが、“政治の貧困”によって、大多数の国民は安心して暮らせる状態にない。

故チャベス大統領は、ベネズエラが世界に誇れるのは「石油と美女だ」と語った。しかし、1日も早く政治体制が整い、中南米の要として活躍できる国になることを期待している。■